

平成 21 年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

—— 学校ボランティア事務局組織の自主的運営に関する課題 ——

洞庭 佳江

東北大学学校ボランティア事務局副代表

東北大学教育学部

足立 佳菜

東北大学学校ボランティア事務局事務補佐

東北大学大学院教育学研究科

本報告は、2003（平成 15）年度より活動を続けている「東北大学学校ボランティア」（以下、学校ボランティア）の 2009（平成 21）年度の取り組みを報告するものである。昨年度までの報告を踏まえ、本年度は学校ボランティア事務局組織の自主的運営に関する課題に焦点をあて、学校ボランティア事務局の立て直しに関する取り組みとその成果について報告する。

本年度は、学校ボランティア事務局（以下、事務局）にとって大きな節目の年であった。それは、昨年度、学校ボランティア及び事務局を発足させた主要な事務局員が卒業したことにより、事務局内に積極的な企画や運営を行う事務局員がいなくなり、継続的な組織運営に課題を抱えたためである。これは本事務局自体が学生のボランティアにより運営されているという性質に起因する根深い問題であるが、これまでは組織を牽引する事務局員の存在により課題としては表面化してこなかった。しかし、本年度はこの問題が鋭敏な課題として浮上したため、事務局の再生と立て直しを図ることとなったのである。この取り組みの中で、事務局は、新たな世代の事務局員が新たな形態の事務局を模索していくことになる。本年度は、その第一歩を踏み出す重要な年となった。

1. 「学校ボランティア」概要

(1) 組織体制

2009（平成 21）年 3 月現在、学校ボランティアには 188 名の学生が登録している。教育学研究科水原克敏教授を顧問とし、同研究室内に設置されている事務局が運営の中心を担っている。下記の学校ボランティア登録学生学部構成表を見ると、多様な学部・大学院の学生が登録していることが分かる。これは、本組織が広く全学を対象にした活動であり、学部を超えて全学部の学生が参加することができるという特徴を表している。また、教育学部（教育学研究科含む）の学生が 3 割を占めていること、理系学部の学生が総じて少ない傾向にあることなどが分かる。これは事務局が事実上教育学部内に設置されているという地理的条件や、広報活動の対象が教職課程履修者に傾倒傾向にあるためであると考えられる。今後は、全学部・大学院に情報が伝わるよう広報活動の在り方を検討したい。

表：学校ボランティア登録学生学部構成表

学部	人数(人)	大学院	人数(人)
教育学部	57	教育学研究科	3
文学部	10	理学研究科	1
法学部	1	農学研究科	1
経済学部	3	医工学研究科	1
工学部	4	情報科学研究科	3
理学部	8	国際文化研究科	3
農学部	1	環境科学研究科	2
医学部	2	不明	88

(※) 不明の内訳：所属（学籍番号、学部学年）不明者 55 名、推定卒業生 33 名。

(2) 本年度の活動数と実際に活動した学生数

本年度は、依頼件数が 46 件（学校が同じ場合でも、活動内容が異なる場合には別件扱い）、達成依頼数が 15 件であった。約 3 割の達成率に留まったが、昨年度以前までと比較して依頼件数が大幅に増加したことが大きな原因であると言える。また実際に活動した学生の人数は 25 名であった。昨年度は 22 名であったことから 3 名増加しているが、以前総数は少なく活動学生の確保は昨年度同様本年度でも課題である。

(3) 「学校ボランティア」および「事務局」の 1 年間の活動の流れ

月	活動
4	学生への説明会（28 日） 教職科目講義内学生募集 六郷中学校活動（～年度末）
5	東二番町小学校活動（～年度末）
6	教職科目講義内学生募集 郡山小学校活動（4 日） 西中田小学校活動（18 日～7 月 16 日） 八幡小学校活動（～年度末） 寺岡小学校活動（～年度末）
7	宮城県教育委員会主催「地域学習支援センター」事業開始（～8 月）
8	木町通小学校（～年度末）
9	南吉成小学校活動（2 日・3 日）
10	郡山小学校活動（6 日） 将監西小学校活動（7 日・8 日）
11	南中山小学校活動（～年度末） 七郷小学校活動（～年度末）
12	八木山小学校活動（～年度末） 柳生小学校活動（～年度末）
1	
2	事務局年度内最終打ち合わせ（10 日） 教育ネットワークセンター年報に事業報告書（本報告書）を執筆 感謝状贈呈式（24 日・予定）

2. 平成 21 年度「学校ボランティア」活動報告

本節では、2009（平成 21）年度に実際に行った学校ボランティア・事務局の活動報告を、活動者の声と共に報告する。

（1）教職科目講義内学生募集

【活動時期】 2009 年 4 月・6 月

【活動場所】 東北大学川内北キャンパス（教育原理Ⅰ・教育学講義内）

【対象】 教職科目履修学生

【活動内容】 学校ボランティアの周知および新規学生ボランティア登録者の確保をねらいとしている。具体的には、講義担当の先生のご協力のもと教職科目（教育原理Ⅰ、教育学）の講義内において 5 分ほどの時間を頂いて、学生に対する学校ボランティアの概要説明とビラの配布を行った。教職科目に限定しているのは、事務局員の人数の都合と教職に興味・関心の強い学生の方がより学校ボランティアに興味を持ち登録・活動するに至る可能性が高いと予測してのことである。

【反省・課題】 短時間でいかに効果的な周知と募集を行うかということが今後の課題である。短時間とは言え講義内の時間を割いて頂くという意識を念頭におきつつ、学生の興味・関心を引く学校ボランティアの簡潔な説明を行っていくことが求められる。また教職科目内学生募集は事務局における広報活動の中心ではあるが、それ以外の講義内でも募集を行うことを検討する必要がある。教職科目を履修する学生の様な学校ボランティアに対する興味・関心が比較的高い学生以外の学生に対しても、学校ボランティアの存在を周知し、興味・関心を持ってもらえるような広報活動を行っていくことも今度の課題である。

（2）学生に対する説明会

【活動時期】 2009 年 4 月 28 日

【活動場所】 東北大学川内南キャンパス文科系総合研究棟 206 教室

【対象】 学生

【活動内容】 文系総合研究棟の一室を使用し、仙台市教育委員会の先生をお招きして、学生に対して学校ボランティアの概要や保険等の説明を行っていただいた。説明会終了後には、登録希望学生の学校ボランティアへの登録も行った。説明会に参加する学生は、未だ学校ボランティアに登録していない学生だけでなく、既に登録した学生も対象としている。一連の活動は、学校ボランティアの概要説明および新規学生ボランティア登録者の確保をそのねらいとしている。仙台市教育委員会から学生に対して正式な説明を行っていただくことで、学生の学校ボランティアへの理解を深め学校ボランティアと事務局への信頼性の確保に繋がっている。

【反省・課題】 説明会当日における事務局の運営が不十分であったことが大きな反省で

ある。説明会は事務局が企画・運営している活動にも関わらず、実態は仙台市教育委員会の学生に対する学校ボランティア説明会に留まってしまっている。仙台市教育委員会からは、学校ボランティアの大枠や保険の様な形式的な説明が行われる。勿論それも重要なことであるが、活動者と同じ「学生」が事務局員であることの特徴を生かし、事務局独自の説明を行い、学生が学校ボランティアの理解を深め学校ボランティアを実際に行うことへの不安感を払拭して安心感が持てるような説明を加えていくことが重要である。

(3) 仙台市教育委員会からの学校ボランティア依頼

① 仙台市立六郷中学校

【活動時期】 2009年5月～2010年3月 毎週水曜日

【活動者】 1名

【活動場所】 同中学校内

【活動内容】 主に、自閉症・情緒障害特別支援学級の生徒を対象に活動を行っていました。特に、その学級生徒の中に、3年生の男子で不登校になってしまった生徒がおり、その生徒への関わりを主に行っていました。始めの期間は、その生徒が学校に来なかったため、私が生徒の自宅へお邪魔して、関わりを持つようにしており、次第に打ち解けるようになってきました。学校ボランティア以外の周囲の支援もあり、夏休みが終わる頃に、徐々に学校へ登校するようになって来ました。そこから、学校での関わりも増えてきました。しかし、その生徒は自閉症・情緒障害特別支援学級にて授業を受けることに抵抗感を持っていたため、私は隣の部屋でその生徒に学習支援を行っていました。その生徒も、無事進路も決まり、最近是非常に穏やかな学校生活を行っています。

【活動者の意見・感想】 初めて、実際の現場にお邪魔して活動をさせていただきました。すべての活動が新鮮で、とても貴重な体験となりました。学校の先生方も私をとて暖かく迎え入れてくれたので、学校に通うことがとても楽しみでした。この経験が今後私の人生の大きな糧になると思っているので、とてもこの活動は有意義なものであったと実感しています。

【担当者の反省・課題】 交通費が全て個人負担となってしまったため、回数を重ねる度に学生の負担が増えるかたちになってしまった。学校側からの依頼だけでなく、学生の卒業論文作成も兼ねたボランティア活動であり、これまでの学校ボランティアにない事例となった。今後も学校側の要望だけでなく、学生側の要望にも応えられるようにしたい。また、交通費に関しても今後の検討が必要である。(阿部 友幸)

② 仙台市立郡山小学校

【活動時期】 2009年①6月4日、②10月6日

【活動者】 ①2名、②1名

【活動場所】 ①宮城県美術館、②八木山動物園

【活動内容】 配慮が必要な子（1年生）のサポート

【活動者の意見・感想】 美術館の時担当した女の子と仲良くなれ、動物園の時も任せてもらえてうれしかった。動物園の時は郡山小学校の先生から直接メールで連絡をいただき、今回もぜひと言っていただけで、前回の様子を認めていただけたことが自分にとって自信になった。

【事務局担当者の反省・課題】 募集期間が通常より短かったことを以外、特に問題はなかった。校外学習など単発で参加しやすい活動への参加者が増えるように働き掛けて行きたい。（鈴木 園子）

③仙台市立西中田小学校

【活動時期】 2009年6月18日～2009年7月16日 毎週木曜

【活動者】 1名

【活動場所】 同小学校内

【活動内容】 2、4年生の普通学級に入り、配慮が必要な子のサポートや先生の補助

【活動者の意見・感想】 たった5回でしたが、時間ごとに3クラスを担当できたため、配慮が必要な子だけでなく、たくさん子どもたちみんなと仲良くなれてとても楽しかった。また、実際に授業に参加したり、自習の時間にクラスを任されたり、丸つけをしたり、子どもたちと給食を食べたり、一緒に掃除したり、小学校教員のような経験ができ、本当に充実した5日間だった。

【事務局担当者の反省・課題】 活動終了の報告を受けるのがかなり遅かったので、やはり定期的に連絡を取り合って現況を把握する必要があると思いました。西中田小の活動は通年で、募集終了の期限もなかったのもので、活動者募集のメールも1度流してしばらくしてからまた流すというやり方ではなく、1～2週に一回くらいで定期的に今募集している学校を一括でメールで流す、というやり方にすればもっと活動者が増えたのではないかと思います。（坂本 侑哉）

④仙台市立八幡小学校

【活動時期】 2009年6月～2010年3月

【活動者】 6名

【活動場所】 同小学校内

【活動内容】 3～6年の算数の授業補助

【活動者の意見・感想】 ●9月から5年・6年生の算数を中心に、学習補助をやっていきます。9月はまだ慣れず、大変でしたが、やりがいがあって良かったです。丸付けや、学習進度の遅めな児童を中心にやっています。最近では、児童が質問をしてくれるようにな

り、わかりやすく教えるのに苦戦しています。なるべく簡単な言葉で説明できるように心がけたいです。小学校の先生方も、とても親切に接してくれます。児童が元気いっぱい、とても楽しいです。現在、私自身が一年でまだ夏休みなので、10月までやります。

●10月は、五年生が新型インフルエンザの影響で学級閉鎖が続いたので、四年生と六年生への算数の学習における補助が多かったと思います。六年生は、9月から教えているので、児童がだいぶ私に慣れてきてくれたみたいで、休み時間等には日々の出来事についても話してくれるようになりました。また、質問も9月よりもしてくれて、とてもやりがいがあったと思います。四年生も、初めてであったにも関わらず、たくさん質問をしてくれました。丸付けのときは、なるべくほめてあげるように心がけました。

●10月は、学芸会もあり色々な学年の演技や演奏を見ました。自分の小学校時代の思い出が懐かしかったです。どの学年も素晴らしかったです。9月、10月は夏休みだったため、午前中ずっと行けましたが、11月からは授業も始るため週一回程度になりそうです。

●二ヶ月間の学校ボランティアはとても私の社会勉強になったと思います。

●10月から授業補助として八幡小学校で活動させていただきました。主に算数の時間に丸つけや個別に教えるといった活動をしました。また、英語活動や理科の授業を見させていただきました。他にも学芸会を見たり、授業研究会にも参加したりと教師にならなければ体験できないようなことも体験できました。大学生のうちには小学校に行く機会はなかなかないので、とても貴重な体験をできました。

【事務局担当者の反省・課題】 活動希望者が多く、なかなかうまく支援することができなかつた。夏季休業を挟んでしまったので、八幡小学校側と希望者の時間を合わせる事がうまくできなかつた。来年度からはマニュアルをうまく活用して、希望者の活動をうまく支援していきたいと思う。(高橋 龍)

⑤仙台市立寺岡小学校

【活動時期】 2009年6月～2010年3月 毎週木曜日

【活動者】 3名

【活動場所】 同小学校内

【活動内容】 英語活動におけるALTと小学生および先生方との通訳、ALTの授業補助活動

【活動者の意見・感想】 子供達との接し方、ALTとの授業の進め方、日本語をどのくらいおぼえていくか、授業についていけない子供達をどのようにフォローしていくかなど、色々な点で勉強をさせていただきました。

【事務局担当者の反省・課題】 本件は、活動者が既に小学校で活動を行っており、“事後的に”本学校ボランティア事務局派遣のボランティア活動として扱うこととなった特殊な事例であった。

どのような経緯で学校側が市教委に依頼を行ったのかは定かでないが、本学校ボランティアに登録して活動すると保険が適用されるという利点があることが要因として考えられる。

本件からは、学校ボランティアの存在の周知状況が課題に浮かび上がったが、逆に、既に活動を行っている学校・活動者からの需要も確認できた。(足立 佳菜)

⑥ 仙台市立木町通小学校

【活動時期】 2009 年 8 月～2010 年 3 月 毎週金曜日

【活動者】 2 名

【活動場所】 同小学校内

【活動内容】 1 年生女子児童（1 名）を対象に、特別に配慮を要する児童への支援。学習面、生活面、移動時など広範囲での支援。特に休み時間の授業の準備や移動の支援。空き時間での、特別支援学級の授業への参加。

【活動者の意見・感想】 大学生活の中では、接することのない小学生との交流は、とても良い経験になりました。授業風景を見学したり、小学校という場所での生活の様子を見ることは、子供達の行動の仕方、先生の授業の教え方など初めて知ることの大変多い、有意義な体験でした。対象の児童との交流は、今までに感じたことのない種類の難しさもありました。友達のように仲良くなることは、接しているうちに次第にできるようになったと思います。しかし、その子がよりうまくみんなとの学校生活をできるようにするためには、どのように支援したらよいのか、ということが私にとっての課題となったと思います。模索しつつ取り組むことが大変良い勉強になりました。特別支援学級の授業の様子を知ることができたのも、新しいよい体験でした。短い期間でしたが、得るものの多い貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

【事務局担当者の反省・課題】 木町通小学校での活動者の方にはボランティアに熱心に取り組んでいただき、こちらも安心してお任せすることができました。担当者として、こちらから小学校さんへの連絡頻度の不十分さを始め、事務局のサポート不足により活動者の方にご負担をおかけしてしまったところもあったと思いますので、その点を反省し、事務局が活動者をしっかりサポートできるよう、来年度以降取り組んでいきたいと思っています。(畠山 祥史)

⑦ 仙台市立南吉成小学校

【活動時期】 2009 年 9 月 2 日・3 日

【活動者】 1 名

【活動場所】 同小学校内

【活動内容】 小学 5 年生の野外活動の援助。

【活動者の意見・感想】 5年生の生徒たちはみなとても元気で、その元気に、ボランティアである自分たちがついていけない状態だった。しかし、度が過ぎるようなこともなく、とても安心してみていられた。今の小学生と自分が小学生の頃の小学生との違いも肌で感じられて非常にいい経験だった。

【事務局担当者の反省・課題】 初めての担当校で勝手がわからず大変な部分もありましたが、大きなトラブルもなく活動を終えることができてよかったです。(田中 茉莉奈)

⑧仙台市立南中山小学校

【活動時期】 2009年11月～2010年3月

【活動者】 1名

【活動場所】 同小学校内

【活動内容】 2年生の普通学級における授業補助（活動日当日に支援学級・授業を指定される）。木曜日の3時間目～5時間目の授業を補助。給食や掃除、昼休みの遊び相手なども担当。

【活動者の意見・感想】 特定の学級を受け持つのではなく、2学年全体（全部で3学級）を受け持ち、当日に指導学級と授業を指示されるという形式だったため、子供たちと仲良くなるのが難しかった。子供たちとの間に信頼関係が築かれていないと授業補助の際に話を聞いてもらえないという経験から、信頼関係の大切さを学んだ。また、子供たちの中には何でもやってもらいたがる子もいて、「補助する」ということと何かを「やってあげる」ことの違いについて考えさせられた。

【事務局担当者の反省・課題】 年度の前半は参加希望の学生がなく、せっかく頂いた依頼に対しお役に立てない不安もありましたので、後半から一人の方が参加して下さったことは事務局担当者として嬉しいことでした。活動者の方は、別の小学校でのボランティアと両立されていて、その積極的なボランティアへの参加は素晴らしいと思います。事務局は、今年度の反省から、なかなか参加者の集まらない依頼に関する呼び掛けに一層の工夫をし、活動者が活動しやすいようなサポートを考えることが必要だと感じました。(畠山 祥史)

⑨仙台市立七郷小学校

【活動時期】 2009年11月～2010年3月 毎週月曜日

【活動者】 1名

【活動場所】 同小学校内

【活動内容】 3年生の普通学級における授業補助（国語、体育）。月曜日の4時間目～5時間目の授業を補助。授業の間に給食や掃除、昼休みがあるので、それらの補助・遊び相手なども担当する。

【活動者の意見・感想】 特定の学級の授業補助だったので、子供たちの名前や顔を覚えやすく、子供たちも早くに馴染んでくれた。新型インフルエンザの流行の影響から時間割の変更もあり、書道など募集要項にない授業も担当した。子供たちからすると、学生ボランティアは「先生」というよりも「遊び相手」に見えるのか、特に男の子はなかなか注意を聞いてくれなくて困った。

(4) 宮城県教育委員会主催「地域学習支援センター」事業

【活動時期】 2009 年 7 月末～8 月

【活動者】 18 名

【活動場所】 会場となる宮城県内の 10 個の高等学校

【活動内容】 「地域学習支援センター」事業は、宮城県教育委員会主催の大学生ボランティアによる小・中学生に対する学習支援活動事業である。事務局では、講義内に学生に対して周知を行うことやポスターを張ることで広報活動を行ったほか、参加希望学生の申し込みの代替などを行った。

【反省・課題】 事務局が活動学生を把握しきれなかったことが反省される。これまでは、東北大学の参加学生については事務局が宮城県教育委員会に申し込みを代替することで、参加学生を把握することができた。しかし本年度の事務局は申し込みを学生個人で行うことを認めたため、参加学生の十分な把握を行うことができなかった。把握している活動学生についても、その後のアフターケア等が不十分だったために十分な活動把握を行うことができなかった。来年度以降、事務局としてどのような方法での申し込みを採用するにしても、依頼を受ける以上事務局として「地域学習支援センター」事業の活動をいかに把握するか検討していくことが課題である。

3. 平成 21 年度「事務局」活動報告

本節では、平成 21 年度事務局が取り組んだ特徴的な活動を 4 点報告する。

(1) 本年度の課題

本年度の事務局における最大の課題は、事務局の立て直しにあった。この背景には、①事務局発足当時を知る主要事務局員の卒業、②引き継ぎの不十分さ、③事務局設置場所である水原研究室の学生不在、④新事務局員の未補充、⑤事務局内部の関係性の希薄化等があった。中でも「①事務局発足当時を知る主要なメンバーが卒業」し事務局から抜けてしまったことは大きく、熱意に溢れ積極的に活動を行う事務局員が抜けたことで事務局の活動は大きく停滞した。更に事務局の活動や作業に関する知識や技術の「②引き継ぎの不十分さ」も、それに拍車をかけることになった。引き継ぎの問題は以前から問題にはなっていたが、主要な事務局員がまだ残っていたことでそれ程深刻視されていなかった。本年度

主要な事務局員が抜けたことで、その問題が一気に深刻化したのである。「③事務局設置場所である水原研究室の学生不在」については、事務局内だけで解決できる問題ではないが、基本的に事務局の業務は水原研究室内で行われているため普段から日常的に研究室に出入りしている人間が事務局内にいなくなったことは事務局にとって大きなダメージであった。「④新事務局員の未補充」については、昨年度の新事務局員が多かったため本年度前半は募集を見送っていたが、結局一年を通して新事務局員が集まらなかったことで引き継ぎの問題と関連して問題になっている。最後の「⑤事務局内部の関係性の希薄化」は、事務局員が増え事務局員全体で集まることが困難になったことや事務局員の熱意に差が出てきたことなどによる。これらの背景から、本年度の事務局は事務局自体の立て直しという大きな課題の解決を迫られた。

そこで、事務局の立て直しにあたり、大きく4つの取り組みを行った。それは、①事務補佐員の設置、②組織体制の見直し、③活動の整理、④HPの復旧作業への着手である。

(2) 取り組み①—事務補佐員の設置

【目的】 まず、年度当初に行った本年度の新たな取り組みは、顧問である水原先生からの要請により、事務局にその活動を補助する事務補佐員を設置したことである。これは直接的には前述の課題③に対応したもので、当初の目的としては以下の3点を掲げていた。第一は、顧問である水原先生と事務局の繋げ役になること、第二は、水原研究室内での作業の円滑化を図ること、第三は、事務局活動状況の全体像を把握し活動を支援することを通して、形式としては本報告書作成を目標にその準備を進めることである。

【活動内容】 事務補佐員は水原研究室の学生である足立が担当することとなった。事務補佐の基本的な活動は、定期的に行われる事務局ミーティングへの参加である。この参加の目的は事務局の活動状況を把握することにあるため、ミーティング内での発言は表立って行わないことを原則としていた。しかし、事務局の立て直しも課題として抱えているため、事務局主要メンバーと相談を進めていく形で、実質的な活動にも関与する形となっていた。こうした日常的な活動の中で、学校ボランティア発足当初からの状況や旧事務局メンバーの学校ボランティアへの思い等を伝えることなども、意識的に行った。

その他の活動は、水原研究室に送られてくるFAX等依頼文書の新着情報を事務局へ連絡することと、水原研究室内に蓄積してある事務局所有資料の整理に着手したことである。一見すると瑣末なことのようにであるが、水原研究室内に出入りしある程度自由に作業を進めることは研究室外部の学生（特に主要メンバーである学部2年生）にとっては物理的にも心理的にも壁があるため、事務補佐の意義が認められる部分であったと言える。

(3) 取り組み②—組織体制の見直し

【目的】 事務局は学生有志により運営を行っているため組織意識が低く、組織の体制自

体あまり意識されることはなかった。しかし、事務局は仙台市教育委員会や仙台市内の学校、近年では宮城県教育委員会とも連携・協力をしている。そうした対外的組織との関係を鑑みても、事務局の組織体制を整えることが活動の基盤として必要不可欠である。これまでは、自然と組織の枠組みも出来上がっていたようであるが、本年度は、意識的に組織体制を見直し整えることとした。

【活動内容】 事務局の組織体制は、代表・副代表・会計の 3 役を設けることになった。本年度は、代表に学部 4 年生の小野寺を据え、副代表に学部 3 年の洞庭と学部 2 年の佐藤を置き組織としての体制を整えた。代表・副代表を各学年から出すことで各学年の状況を踏まえた上で活動を行うことができるようにした。会計は洞庭と事務補佐員の足立の 2 名が担当した。組織体制が形式的に整ったことにより、対外組織に対する中心が定まったこと、事務局内部の活動の円滑化が図れたことが成果である。しかしながら課題も残り、代表・副代表の連携の強化や、代表・副代表という中枢と他の事務局員との情報共有をいかに行うかが今後の課題である。

(4) 取り組み③ー活動の整理（所有書類等の整理、マニュアル作成）

【目的】 事務局の活動自体は例年に倣って継続こそしていたが、事務局員の事務局の活動に対する認識と理解には個人差があった。これは発足当時の主要な事務局員の卒業に加えて、引継ぎが上手くいかなかったことが大きな原因といえる。そのため、事務局の活動や作業について、事務局内部で一度整理をし、活動の全体を把握することを目的として本取り組みを開始した。

【活動内容】 事務局の活動把握にあたっては、書類の整理とマニュアル作成の 2 つの活動を軸に行った。まずは、水原研究室内に蓄積していた事務局所有の資料を整理することから始めた。これは事務局が 2003 年（平成 15 年）に発足してから年々積み重ねてきた、謂わば事務局の軌跡である。これらを整理することにより、発足当初から昨年度まで行われてきた事務局の活動についての個別具体的な情報を手に入れることができた。これらの作業からのみでは得られない不足情報については、毎年投稿している『教育ネットワークセンター年報』の報告を収集し、そこから情報を得ることにした。

そして、資料整理によって得た情報と現在実際に事務局内で行っている作業情報を基に、事務局のマニュアルの作成に取り掛かった。これまで事務局においてはマニュアルというものは存在せず完全に手探り状態であった。マニュアル作成は事務局員中の有志数人で行うことになった。マニュアル作成は①基本情報、②通常業務、③季節業務の 3 本柱で行ったが、この作業と関連して、ボランティア登録者名簿の整理を大々的に行い、これに伴って主要業務の一連の作業の見直しも行った。また、マニュアルには、今後行っていったら良いと考える活動・作業案も記載した。これらの作業により交錯していた情報が系統的に整理されただけでなく、発足当時の事務局員の熱意を知り、事務局の存在意義や活動意図

について考察する切欠となった。

(5) 取り組み④—HPの復旧作業への着手

【目的】 第四の取り組みは、HPの復旧作業である。学校ボランティアではHPを開設しているが、昨年度より不具合が生じ、HPでの作業が行えずにいた。HPでは、メール以外の媒体で登録者が募集依頼の一覧を確認したり、最もHPが活用されていた時期には、活動者の登録依頼や活動報告書の提出も行っていった。また、HPは外部への情報発信の重要な役割を果たすものでもある。これら、作業の円滑化・外部への情報発信体制の再構築を目的に、早急な復旧作業が課題であった。

【活動内容】 HPの復旧作業が停滞していた最たる要因は、それが技術的に可能な人材がいなかったことである。本HPは事務局発足当初の工学系のメンバーが開設したという経緯もあり、現事務局メンバーでは問題状況を認識することさえも困難であった。そこで、本年度は、教育情報学教育部の三浦氏（修士学生）に協力を要請することで、復旧作業を前進させることができた。今後、事務局内にもHPの日常的管理を行う人員を配置することが決定しているが、こうしたインターネット関係の技術的側面の相談のみで事務局に関わっていただくいわば事務局の外部機関を設ける形で協力をお願いしたいと考えている。

4. 本年度の成果と今後の課題

本年度最大の成果は、事務局の立て直しにある程度成功したである。特に、マニュアルの完成は、事務局の組織としての概要や活動の把握の証であり、これにより事務局は活動や業務を把握し実施するという内実も伴えるようになった。しかし、事務局の体質改善という点においては未だ多々課題が残る。以下、課題を3点考察する。

(1) 事務局の運営システムの再検討

現在の事務局は、学年や所属年数によって事務局内で求められる活動内容がある程度決められている。学年や所属年数は確かに一定の目安となるが、事務局は有志の集まりである以上必ずしもそれに拠る運営は保障できない。新事務局員は毎年集められる保障はなく、事務局員の学年や人数も年によりまちまちである上に、既存の事務局員がその年に事務局の活動にどの程度参加できるかは不明瞭なのである。そこで今後は、学年や所属年数に拠らず活動できる若しくは熱意のある事務局員により運営が行えるような運営システムを検討することが課題である。

(2) 事務局員の意識向上

次に、事務局員の意識向上である。世代交代により、新たに加わった事務局員は、発足当時の学校ボランティアの意図を知ることもなく、事務局の目的や意義さへ分からない状

態である。こうした状態は、活動の形式化・形骸化を生む要因となる。これを打開すべくマニュアルを作成したことで事務局の活動は引き継ぎやすくなったが、このマニュアルは使い方によっては事務局の活動の更なる形式化・形骸化を招く危険性も孕んでいる。これを防ぐためには、さらに事務局員の意識を向上させていくことが必要不可欠である。本年度の事務局の立て直しの取り組みに携わった一部の事務局員は事務局の活動を探ることによってその意義や目的、引いては学校ボランティアの意図を考察する機会を得た。今後の事務局に必要なのは、この様な事務局の意義や目的について考える機会を設けることで事務局員の自らの活動に対する意識を向上させることであると言えよう。

(3) 活動学生との関係改善・支援体制改善

最後に、今後は活動学生との関係を密接にし、連携を深めていくことが求められる。現在の事務局は、活動希望学生を学校に派遣した後は、登録者全体へのメール配信や活動報告書提出をお願いする以外にはほぼ活動学生と連絡をとることがない。しかし、事務局がボランティアを派遣する組織として、派遣先の学校側に活動者を保障する意味でも、活動する学生のボランティア活動を支援する意味でも、事務局内で今後の取り組みを改善していく意味でも、事務局が活動学生（の活動）を把握することは必須であろう。

そもそも事務局は発足当初からの目的の1つに「活動を通して学生が社会の一員として成長していくこと」を掲げており、その目的達成という観点から活動学生の成長を助ける支援を事務局は行っていくべきである。事務局が行う活動学生に対する支援としては、ボランティア活動前には活動学生との顔合わせや、ボランティア活動における諸注意およびアドバイスが可能であろう。ボランティア活動中や活動後においても、活動中の相談や報告書のようなアフターケア等の支援ができる。こうした十分な支援により、活動学生に学校ボランティアへ参加することへの安心感や楽しさを感じてもらい、事務局に対する信頼感を持ってもらうことができる。こうした支援の充実を行っていくことで活動者と事務局の関係をより密にし、学校ボランティア本来の活動の充実を図っていくことが、今後の事務局の最重要課題である。

5. 終わりに

本年度は事務局にとって、今後の継続的な運営推進を行う上で節目の年であった。発足当時からの主要な事務局員が抜けたことで新しく誕生した謂わば「新生」の事務局は、本年度の取り組みにより事務局内部の立て直しに着手し、徐々に体制が整いつつあるとは言え、未だ手探りで今後の方向性を探っている段階である。次年度以降、事務局は「立て直し」という事務局内部の課題から、事務局の本来の活動目的に立ち返りその達成に向け「活動学生との関係改善・支援体制改善」という次なる課題の解決に取り組んでいく必要がある。その前提として、事務局の運営システムの再検討と事務局員の意識向上に向けて、事

務局内部の更なる改善に努めていくことが求められる。こうした取り組みの先に、学校ボランティアと事務局の維持・発展があると信じ、本稿の結びとする。